

マルマラ地震(1999・トルコ)被災者の
口述記録調査のエスノグラフィー
～トルコにおける災害の集合的記憶の伝承をめぐって～

**An Ethnography:
Recording Narratives of Survivors from the
1999 Marmara Earthquake as a Collective
Memorization of Disasters in Turkey**

井藤 聖子¹・山中 速人²
Kiyoko Ito and Hayato Yamanaka

2018 marks 19 years since the Marmara Earthquake struck the Republic of Turkey on August 17, 1999; its epicentre was located near İzmit City in Kocaeli Province. We interviewed some of the Marmara Earthquake survivors to clarify how they are passing on their recollections of the earthquake. The personal narratives of survivors are important not only for future disaster prevention efforts, but also in terms of studies in oral literature and social history in which such records have considerable academic value. We visited the disaster-affected area of Gölçük to take videos and voice recordings of several Marmara Earthquake survivors describing their experiences. This paper summarizes the process and outcome of these interviews, and also considers how the survivors' stories are positioned in Turkey's academic research. The interviews showed that these survivors recall their individual experiences extremely proactively and eloquently. Considering the empathy evoked by sharing such stories, which move the people who listen to them, it is understandable how these tales are a type of oral literature and storytelling. We anticipate the importance of these survivors' stories and their records will become more widely recognized in Turkish society.

キーワード：マルマラ地震、口述記録、被災者、集合的記憶、エスノグラフィー

Key Words : Marmara Earthquake, Narrative Recording, Disaster Survivors,
Collective Memorization, Ethnography

1 関西学院大学経済学部非常勤講師、文学博士(イスタンブール大学)。本調査では、エスノグラフィ本文を担当し、結果の考察を共同執筆した。
2 関西学院大学総合政策学部教授、社会学博士(関西学院大学)。本調査では、映像音声収録と編集を担当し、結果の考察を共同執筆した。

1. はじめに～問題関心と調査の概要

マルマラ地震³は、1999年8月17日にトルコ共和国の南西部にあたるマルマラ海沿岸にあるコジャエリ(Kocaeli)県イズミット(İzmit)市付近を震源として発生したマグニチュード7.6の地震である。この地震によってマルマラ海沿岸に3メートルの津波も発生した。また、震源地域から約100キロメートル離れたイスタンブルでも地震の強い揺れが観測され、建物の倒壊など被害が生じた。この地震によって、マルマラ海沿岸にあり人口が集中しているギョルジュクにある精油所や海軍関係施設が炎上し、さらに被害を拡大させた。震源の近くに海軍基地があったため、軍関係者に多くの犠牲者が出た。また、この周辺のマルマラ海沿岸地域は、海岸リゾートとして発展していたため、地震の起こった夏の時期は、リゾート施設に滞在中の多くの保養客が崩れた建物によって被災し、被害を増大させた。地震による被害は、正式記録では死者18,373人、負傷者43,953人であるが、実態は、死者行方不明者をあわせて約4万5000人、負傷者も約4万5000人におよぶと推定されている。

1995年に阪神淡路大震災を経験し、災害救援の国際協力の機運が高まっていた日本では、このマルマラ地震とその被災者支援に対する関心は高く、日本からも多くの人的物的な支援が行われた。1995年当時、明石で阪神淡路大震災を経験し、その後、被災地での外国人支援のボランティア活動に参加した経験をもつ私(報告者)は、その後、トルコのアナトリア中央高原地帯にあるカイセリにある大学に日本語講師として赴任し、それを契機として、イスタンブル大学大学院社会学研究所大学院でトルコにおける口頭伝承文芸の研究に従事することとなった。私にとってこの地震は、私の阪神淡路大震災をあらためて、思い起こさせる経験であり、また、トルコに在住し、身近に被災

状況を見聞きしたことで、さらに強い印象と記憶が残るところとなった。

日本では災害被災経験を被災者自身による口述の記録として、収集保存する試みが広く行われている。民俗学や文化人類学の研究者がその活動に積極的に取り組み、また、行政や民間団体もその活動に支援や助成を与えることに熱心である。被災者自身による口述記録は、災害の経験を将来に伝承し、将来発生する災害に備えた防災意識を醸成するという目的を第一義的には持つのだが、たんにそれだけにとどまらず、災害研究あるいは、その関連領域としての民俗学研究や社会史研究にとって欠くことのできない重要な構成要素として学術的にその価値が広く認められている。

マルマラ地震が発災して、2019年で20年になる。この20年の時間の経過を経て、現在、被災者たちは、この地震の経験について、どのような形でその記憶の継承が計られているのか、強い関心をもった。

トルコで口頭伝承文芸研究を専攻する者として、このマルマラ地震の被災者の「語り」を口頭伝承の一つの形態として記録することの価値と重要性は当然、認識するところである。しかし、トルコでは、災害被災者の口頭伝承が必ずしも十分に注目されることはなく、また、民俗学研究者や口頭伝承文芸研究者にもその必要性が認識されているようには思われない。

むしろ、マルマラ地震を始めとする被災者の「語り」への関心は、日本から被災地を訪ねた人類学者たちに濃厚に存在していたのではないかとさえ思える。2008年に2度にわたって被災地を訪問し、被災者28名に対して、被災当時の記憶、避難生活の記憶、復興過程の記憶のそれぞれ時期の異なる3つの記憶を対象に聞き取り調査を行った人類学者の木村周平は、震災の記憶の伝承につい

3 マルマラ地震は、別に、イズミット地震、トルコ北西部地震、トルコ・コジャエリ地震などとも呼ばれている。

て、トルコ人たちがその重要性を語りはするものの、「災害に関する出版物が公的あるいは私的な組織によって収集・保存されているという事実は確認できなかった」⁴と記している。そして、木村が被災者の記憶の継承に関わるほぼ唯一の施設と見なしていた「地震文化博物館」(Deprem Kültür Muzesi)⁵においても、被災者の「語り」を伝える展示は存在していない。

そのようなトルコの状況を前にして、小さな試みであっても、被災地を訪問し、被災者の声に接し、口述の記録をとる試みを始めること、そして、その試みの過程から、トルコで災害被災者の口述記録の収集保存を進めるために何が必要なのかについて知見を得ようと考えた。

今回、共同研究者である山中の特別研究期間を活用して、被災地を訪問し、被災者にインタビューすることを通して、被災者の口述の記録を映像と音声によって採集することを試みた。そして、その作業を行うことによって、被災者自身による口述伝承がトルコ社会で行われうるその可能性についても考えることにした。以後、報告されるのは、この試みの端緒となった被災地でのフィールドワークにかかるエスノグラフィーである。

2. マルマラ地震被災者の「語り」の口述記録調査～エスノグラフィー

a. 震源の町を訪ねる

2018年7月26日木曜日、マルマラ地震の被災地に聞き取り調査に出かけた。

調査に先立って、イスタンブル在住の研究者のNH氏(大学でするメディア学を教える女性研究者)に、マルマラ地震の被災者の聞き取り調査をしたいので、現地でも聞き取りに応じてくれる被災

者を紹介してほしいと依頼の電話をした。すると、彼女の弟が、当時、兵役で震源地に近い街で任務に就いていて、地震のことはよく覚えているので、震源地を案内し、さらに、体験を語ってくれることやその撮影にも応じることを快諾してくれた。そして、当日、私(報告者)、NH氏、彼女の弟のNZ氏、そして、山中(共同研究者)の4人で被災地を訪ねることとなった。

マルマラ海に面したイスタンブルの港からフェリーでマルマラ海を渡り、ヤロヴァ(Yalova)という温泉で有名な町に着き、そこから、さらに車で地震被害の中心になった町、ギョルジュク(Gölcük)に向かった。地図1は、今回訪問したマルマラ地震の被災地周辺の地図である。

その車中で、NZ氏は、震災に遭った彼の友人の話の始めた。

地震が起こった時、その友人と家族は家の中にいた。彼は子どもを守らなければいけないと思い、自分の子どもを抱きかかえて、3階の窓から飛び降りたという。3階から地面に飛び降りたのだから、おそらく骨折など負傷しているに違いないはずなのに、ほとんど痛さを感じなかった。なぜかと思い、よくまわりを見てみると、3階だったところが地上になっていたという。

当時、兵役に就いていたNZ氏は、地震で亡くなった兵隊たちが身に付けていたはずの認識票(血液型と名前が記してあるプレート)がばらばらに混ざってしまい、犠牲者の特定ができない状態になってしまったと話した。

NZ氏が当時の状態を回想しているうちに、われわれの乗った車は、震源地のギョルジュクに着いた。写真1は、ギョルジュクの訪問時の街並みを撮影したものである。ギョルジュクの町は、マ

4 木村周平による報告。引用元は、阪本真由美、木村周平、松多信尚、松岡格、矢守克也「震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—」『京都大学防災研究所年報』No.52B, 2009年6月, p.184より。

5 コジャエリ県の隣県サカリヤ県アダパザル市に2004年に開設された博物館で、マルマラ地震にまつわる歴史の展示を行った。この博物館の映像(日本語)による紹介としては、(FMYY・耳をすましてリスニング・トゥゲザー！2015春の特番シリーズ)第4回「サカリヤ地震博物館を訪ねる」がある。<https://www.youtube.com/watch?v=Ys0RjoLTBro>



地図1



写真1 震源地ギョルジュクの街並み

ルマラ海の海浜部に発達した商業都市である。車はさらにその町の商店が密集した商店街の一角に進入した。商店街には、地震の痕跡は全く残っていなかった。商店街の道路の左側には他のトルコの都市でよく見かけるように車が密集して縦列に駐車し、混雑していた。さいわい理髪店の前にスペースがあったので、そこに車を停めることにした。運転していたNZ氏が、理髪店の中にいた

若い男性に、そこに駐車もいいかと尋ねた。すると、男性2人が店の中から出て来て、問題はないと答えた。

その男性2人に、1999年のマルマラ地震のことを覚えているかと、NZ氏が話しかけた。そして、地震を体験した町の人たちから話を聞くために日本から2人の日本人がやってきたと伝えた。若者2人は、地震当時は、まだまだ小さな子どもだった

が、地震のことを覚えていると、躊躇せず話を始めた。我々は、停めた車の傍らに立ったまま、彼らの話を聞くことになった。写真2は、その2人の若者との会話の様子を撮影したものである。(プライバシー保護のため画像は加工処理している。)

ギョルジュクには、地震の揺れによって海岸部に大波が押し寄せたという。町は、地震の揺れに加えて、この大波によっても壊滅的な被害を受けた。

我々が若者2人の話を聞いているところに、白髪で無精髭をはやし、赤いポロシャツを着た中年の男性がやってきて話に加わった。その男性も被災者だった。その男性の被災体験をさらに聞いていると、その男性は、息子を地震で亡くした人を知っていると我々に告げた。そして、「今、ATMにお金を下ろしに行ったから、呼んでこよう」と言って、1人の老人を連れてきた。

b. 震災で息子を亡くした老人の「語り」

その老人は、頭髮は白髪まじりで薄く、同じく白髪の混じった口ひげをたくわえ、ポロシャツを着ていた。老人自身は、地震当日、被災地を離れていた。しかし、残っていた息子が大波にのまれて亡くなった。老人は、次のように話をはじめた。写真3は、その息子を亡くした老人が語る様子を撮影したものである。(プライバシー保護のため画像は加工処理している。)

「私どもはね。そう私どもといえば、イズミル(İzmir)のフォチャ(Foça)⁶に休暇に行っていました。…見ました。朝になって、すべてが埃と煙の中。…ギョルジュクで地震が起こったと聞き、帰ってまいりました。…ギョルジュクは、本当に美しいところでしたよ。愛らしくてね。でも、すべてを失ってしまいました。息子も、店もなくしました。…息子が住んでいた家、



写真2 商店街にて



写真3 震災体験を語る被災者

庭でお茶などの飲み物が飲める喫茶店があつてね、それもこれも、すべてが壊れて、何も残りませんでした。息子はダイバーらに見つけられました。何と言ったら…悲しみはとても深かったです。…しかし、今の若い人たちは、この惨事を知らないのです。…それまで9日間眠れませんでした。息子が見つけれられることを待っていたのです。いっそのまま、行方不明のままであってほしいとさえ思いました。トルコ中、あらゆる場所を探しました。でも、残念ながら、9日後、息子は…。だって、孫は私にこう言っていました。『お父さんは、きっとここにいる。だって、ほくのお父さんは泳げる』って。話すことなどできません。あまりに悲しくて。…何て言えば…高ぶってしまつて説明でき

6 トルコ南西部にあり、エーゲ海に面した都市。リゾート地として有名。

ません。]⁷

上述の「語り」に相当する口述記録の原文(トルコ語)は以下のとおりである。なお、口述記録の作成に際しては、発話者の言葉どおりに文字に起こした。

Biz, biz ise tatile gitmiştik İzmir Foça'ya. Bi baktık sabahleyin her taraf toz duman içinde. Gölcük deprem olmuş dediler. Geldik buraya. … Gölcüğümüz çok güzeldi. Çok şirin bir yerdi ama her şeyi kaybettik. Çocuklarımı kaybettim, dükkanımı kaybettim. Hiç bir şeyim kalmadı. … Benim oğlumun olduğu yerde dahi çay bahçemiz vardı, çöktü, hiç bi yer kalmadı. Dokuz gün sonra dalgıçlarılan bulduk. Yani acılarımız çok değin. … Genç nesil bunları bilmiyor. … Dokuz gün uyumadık yani. Çocuğumuzun çıkmasını bekledik. Yani gaybını yani gayıp olmasını bekledik. Öldüğü halde gitti ama kendisini de böyle bi şeyle dört gözle nereden(ağlama sesinden dolayı anlaşılıyor) çıkacak diye Türkiye'nin heç bi tarafını bırakmadık. … Maalesef, dokuzuncusu günü çocuğum, zaten torunum diyordu 'Babam burda' diye. 'Babam yüzer benim' diyordu.(ağlama sesi ile geçen arabaların gürültüsünden duyulmuyor.) Anlatamıyorum daha çok acı bi şey. … Yani heyecandan anlatamıyorum.

老人は、時々、声を震わせ、涙ぐみながら話した。そして、「アッラーよ、どうか二度と、だれも同じ目に遭わせないようにしてください。アッラーよ、どうかお救いください。」と、何度も繰り返した。老人の左手には携帯が、右手にはATM

のレシートが握られたままだった。老人は、両手を首の高さまで掲げ、上下に揺らしながら語った。この様子を見て、私は、老人が必死に自分の言葉を探りながら話しているように感じた。そして、話の途中、当時を思い出したためか、時々、大声になったり、涙ぐんだりした。そのような老人の姿を見て、私も涙を流した。そして老人の腕にそっと手を置いたのだった。

老人は、亡くなった息子の話を何度も繰り返した。発見された息子の遺体には、額に1リラ硬貨(直径約2.5cm)ぐらいの大きさの傷があるだけだったこと、そして、顔面が蒼白だったことも涙ながらに話した。

私は、老人に「悲しい経験を話してくれて、有難うございました。辛い思いを思い出させてしまい、ごめんなさい。息子さんのいる場所が、天国でありますように」と伝えた。この言葉に対して、老人は、自分たちの話に関心を持ってくれたこと、そして、話を聞きに来てくれたことに何度も感謝の言葉を繰り返した。

老人は、蜂蜜とトゥルシュ(turşu)という漬物を扱う商店の店主で、「店には、息子の写真と新聞記事があるから、見せてあげよう」と言った。そこで、我々は「後で寄ります」と答え、一旦、老人と別れた。

ここから、我々は移動し、中心街の公園で別の老人たちから話を聞いた。そして、その後、老人の漬物店をあらためて訪問した。時間は前後するが、以下は、その漬物店での出来事である。老人から聞いていた言葉の通りに、商店街に彼の漬物店を探した。しかし、なかなか分からず、何軒か付近の商店に聞いてまわった。そして、ようやく表通りから分岐した小道の右側に、老人の店を見つけた。写真4は、その老人の漬物店を表の通りから撮影したものである。

7 カギ括弧で囲み、独立した段落として表記した会話部分は、調査対象者の「語り」を正確に口述記録したトルコ語の逐語録から日本語に翻訳したものである。さらに、その部分に相当するトルコ語の原文をあわせて表記している。



写真4 被災した老人が営む漬物店

老人の小さい店の棚には、プラスチックの容器に入ったさまざまな種類のトルルシュと、ガラス瓶に入った蜂蜜が並んでいた。老人は、私たちを見ると、すぐに店の奥の金庫から、息子と一緒に映っている写真を取り出してきて、われわれに見せた。その写真には、森と湖を背景にして、老人が息子と肩を組んで映っていた。写真の中の老人は、まだ髪の毛も髭も黒々としていた。そして、息子と2人で映っている写真が印刷されている古い名刺を取り出し、我々にくれた。

老人は、金庫の中から紙の束を出してきて、息子の記事が載った新聞の切り抜きを探そうと1枚ずつ広げた。そして、すべての紙の束を広げましたが、結局、記事はそこにはなかった。

老人は、我々に昼食とお茶をご馳走したいと何度も申し出たが、辞退し、そこを離れた。別れの際に、我々がお礼を兼ねて店の蜂蜜を買おうとすると、老人は、逆にプレゼントしたいと言い、固辞する我々と押し問答になった。結局、蜂蜜の一瓶を我々が買い、一瓶を老人が我々にプレゼントした。また、容器に入ったキュウリのトルルシュもプレゼントしてくれた。最後に、老人は、「連絡してほしい、それを待っている」と我々に告げた。

c. 公園で出会った2人の老人の「語り」

時間を戻して、老人の漬物店を訪ねると約束して一旦別れた後、我々は、町の一番繁華な商店街

を歩いていった。歩きながら、私はNZ氏に、町のどこかに震災の記念碑や慰霊碑などがあれば訪ねたいと話した。我々の求めに対して、NZ氏の姉でもあるNH氏は、海軍施設の前を通りかかったとき、この地震では、軍関係者たちもたくさん犠牲になったので、この軍の施設内には、犠牲者の名を刻んだ慰霊碑があるが、軍事施設なので外国人は入ることができないと答えた。それを受けて、私が、さらに、一般の人々のための慰霊碑やモニュメントはないのかと聞いた。しかし、NH氏は、軍関係者の慰霊碑ならあると、繰り返すのみだった。NH氏は、自分たちの軍隊、つまりトルコ共和国軍は、地震の犠牲者を無視していない、きちんと慰霊しているのだと言いたかったのだろう。とはいえ、我々が歩いた町のどこにも、地震に関するモニュメントや慰霊碑は見当たらなかった。

しばらく歩くと、我々は、鳩が群れる大きな広場に出た。写真5は、その広場の写真である。広場の周りには、服飾店や飲食店で賑わっていた。広場の樹々の下にはいくつもベンチがあり、そのベンチの1つに、老人が2人座っていた。2人とも白髪で、白い口髭をたくわえていた。そのうちの1人は、眉も白かった。

その2人に、NZ氏が「地震の時に、ここにいましたか」と話しかけ、我々が来た理由を説明した。この2人の老人たちも被災者だった。彼らは我々の来訪の理由を知ると、自分たちの横に座るように手招きした。

白い眉の老人が、まず、自分の被災体験を語りはじめた。写真6は、その2人の老人が語る様子を撮影したものである。(プライバシー保護のため画像は加工処理している。)

「その時、もちろん寝ていましたよ。その時、地震がおこったんだ。1人で自宅に。地震があつて、とにかく外に出なければと思ひ、ズボ



写真5 ギョルジュクを中心街にある広場

ンを履こうとしたけれど、ひどい揺れのためにズボンが履けなかったんだ。やっとの思いで外にでたら、そこは瓦礫の山だった。学校の校庭にたどり着いたら、みんな、泣いていた。嘆き悲しんでいる者もおった。瓦礫の間から男の手が折れて突き出しているのを見た。きっとバルコニーに出て座っていたんだらうな。瓦礫の下から腕や脚が出ているのを見たよ。…酔っばらっていたんだらうな。一人の男が地面に倒れたまま、手は何かを叩こうと動いていた。きっと自分の家のドアを叩いているつもりだったんだらう。でも、ほんとうは地面に寝ていたのさ。ドアはどこだとずっと探して、叩いていたんだらうよ。」



写真6 公園で被災体験を語る老人たち

上述の「語り」に相当する口述記録の原文(トルコ語)は以下のとおりである。

Ben ya tabi uyuyorum. O arada bir deprem oluyor işte. Pantolonum böyle. Ya yalnızım evde de. Yatak şöyle. Pantolon öyle. Pantolonu alıp giyemiyorum. Sanki duvarlar böööyle aaaaa. Bir ara pantolonu giydik dışarıya çıkacam. O anda işte bi sürü bi şeyler var yıkılmışlar kırılmışlar. Ayaklar parça... pa. Dışarı çıktım o okul bahçesine. Herkes ağlıyor bağıyor sızlıyor. Aşağa indim herifin elleri böyle kalmış yıkılmış tamam mı, balkonda oturuyormuş herhalde. Ayakları gözüküyor, elleri gözüküyor. Biri de içmiş kafayı bulmuş tamam mı. Deprem yıkmış evin kapısını vuruyor halbuki yerde kendisi. Kapı nerede diye habire arıyor tıklıyor yani.

これに続いて、もう1人の老人が「一番辛い目にあったのは、私です。…じつは、3日間、崩れた家の下敷きになっていました。」と話し始めた。最初に話した白い眉の老人が「そうだ、そうだ、お前はすごい体験をしたんだから、是非話してやれよ。」と続けた。その声に促されて、もう1人の老

人は、ゆっくりと静かに語り始めた。

「地震の後、3日間、私は、妻と子どもたちとともに瓦礫の下に閉じ込められておりましたよ。子どもたちは子ども部屋で、私と妻は寝室で。建物は、まるでダンボール箱のようにつぶれました。そう、3日間、閉じ込められた後、イスラエルの救助隊が助け出してくれました。えっと…下から掘りながら。余震が続いていて、建物は余震で崩れる恐れがありました。そして、案の定、多くが余震で崩れてしまいました。私たちは、アッラーのご加護により、建物の折れた梁や柱の隙間におりました。そうでなければ、圧死していたに違いありません。3日間、食べ物も飲み物もなく、明かりさえありませんでした。寿命がまだあったのですね、私たちを見つけて出してくれました。お聞きになりたいことを、お話すると、今の若い人たちやほかの土地の人たちは、この事実を真剣に考えていません。当時の建物は、検査なしに建てられ、必要な材料も使われていませんでした。だから、最初の揺れで我々は崩れ落ちてしまったのですよ、下に。下に崩れて、その上に次の揺れが来たので、またその下に落ちて行きました。それなので、現在は、検査、検査とうるさく言っているようですが、私は、必要な検査が行われているとは信じておりません。信じることなんてできませんよ。もし、イスタンブルに大きな地震が起これば、もっと大きな被害がでるでしょう。古い建物の表を塗っただけで、新しそうに見せかけているだけなんですからね。」

上述の「語り」に相当する口述記録の原文(トルコ語)は以下のとおりである。

Ben üç gün enkazda kaldım. Ailemle, çocuklarımla. Bina çöktü biz içinde kaldık. Üç gün çocuklarım çocuk odasında, hanım eşim

ve ben yatak odamızdaydık. Bina çöktü karton kutu gibi. Ee üç gün biz orda mahsur kaldık. Üç gün sonra kurtarma ekipleri geldiğinde İsrail ekibi bizi ordan çıkardı. Şey... aşağıdan kazarak... şey yaparak. Bina... zaten her zaman artçılar oluyordu. Artçılar olduğundan çökme tehlikesi çoğudu. Çökmüştü de işte yani... Biz Allahın hikmetidir ki o kirişler var sütünlere binaların şeyleri, o ortadan bölündü biz arada kaldık. Yoksa biz gitmiştik yani. Üç gün orada aç susuz şaysız ışısız kaldık. Geldiler ömrümüz varmış bizi aldılar çıkardılar. Şimdi sizin sorunuza gelince şu andaki gençlik ve yahut da başka muhitlerden gelen insanlar bunların bilincinde yaşamıyorlar. Binalar o zaman çok denetimsiz yapıldı. ...Denetimsiz yapıldı. Layıkıyla beton demiri, şunu bunu kullanılmadı. Dolayısıyla şimdiki şeyler gene denetim menetim falan diyorlar ama ben pek layıkıyla yapıldığına inanmıyorum. Yani denetimlerin layıkıyla yapıldığına inanmıyorum Artık inanmıyorum. Eğer bu gündemde olan büyük İstanbul depreminde burda daha çok yıkılacak bina var. Hepsi rütüş yapıldı boyandı.

老人は淡々と語った。そして、一週間後に日本から救援チームが来たと言った。日本の救援チームは、助け出された老人に「神様を怒らせたからだね」と言っただけで、新しそうに見せかけているだけなんですからね。」

「いやいや、その隊員は、正しいことを言ったんです。そうじゃない、批判するために申し上げたんじゃない。本当のことを言ったんです。」



写真7 震災当時、炎上した精油所

まったくね。今のことだけ、将来の危険は無視して、お金のことだけしか考えない。そんなことしていたから、こんな結果になったんです。3日間、そう3日間、こんなふうに、顔を下にしたまま横になっていました。まったく動けなかったんですよ。生きたまま、生きたまま、お墓に。でも息はしてました。『助けて!』と叫ぶ声が、まわりのあちこちから聞こえていたのです。でも、若い世代の人たちは、まったくこの事の重大さを気にしていませんよ。おわかりになられたでしょうか。』

上述の「語り」に相当する口述記録の原文(トルコ語)は以下のとおりである。

Yok yok. A doğruyu söyledi yani. Ben bu şekilde değil yani eleştiri babında söylemiyorum. Doğruyu söyledi yani. Sen şimdi yaparken, efendim, bunu ileriye dönük rizikolarını göz ardı edersen, ben fazla para kazanayım dersen, olacağı budur. Üç gün üç gün bö böyle yüzü koyun yattık. Yani şöyle dönemiyorduk. Yani canlı canlı mezar . Böyle size tarif edebilirim. Nefes alıyorduk ama çok sesler geliyordu. 'Kurtaran yok mu?' 'imdat.'

şekilde ama. Yani yeni nesilde bu bilinç yok. Şu anda yok. Bilmem anlatabildim mi?

この老人の言葉から、建物がいかに脆弱で、いかに完全に崩れたか、容易に想像できた。そして、私は、「生きたままお墓に入れられた」という老人の表現に胸が痛んだ。最後に、私が礼を言い、握手したときも、老人はずっと優しくほほえんでいた。

d. カフヴェハネで出会った老人たちの「語り」

息子を亡くした老人の漬物店から立ち去った後、我々は来た道を引き返して、ヤロヴァへと向かった。道路の海側には、低層のアパート群が並んでいた。真新しい建物と古い建物が混在していた。新しい建物は、震災後に建てられたものだという。山側には、高層のアパートが並んでいた。ところどころに、空き地になって雑草が繁茂している場所もあった。それらの場所は、地震の際の大波で流されて、その後何も建てられていないのだと聞いた。また、道路の端から海越しに、震災時に炎上して大きな被害を被った精油所を観ることができた。写真7は、海越しにみた精油所の写真である。



写真8 カフヴェハネに集う男性たち

地震の被害があった地域は、夏の別荘地域だったため、滞在客の多くが被害にあった。山側に、建物の基礎部分だけが残っている別荘跡が数多く見かけられた。そこには、別荘は再建されず、無残な建物の痕跡だけが何棟分も、むき出しのまま残っていた。

私たちは、ヤロヴァからイスタンブルへ帰りのフェリーに乗船する前に、NZ氏の話映像で収録するため、どこか静かな場所を探した。そして、ようやく海岸近くにカフヴェハネ(kahvehane)⁸が見つかった。

そんな男性の溜まり場所の傍らで、映像収録ができるのかと心配したが、店の一角には、誰もおらず、カフヴェハネの店主もすんなりと一角の提供を許してくれたので、そこでNZ氏のマルマラ地震の体験談を収録することになった。写真8は、そのカフヴェハネに集う男性たちの様子を撮影したものである。(プライバシー保護のため画像は加工処理している。)

NZ氏は、自分自身の震災体験や軍関係者とし

て被災地で行った救援活動についての経験を語った⁹。滞りなくビデオ収録が終わり、カフヴェハネから表の道に出たところで、収録場所となったカフヴェハネの写真を撮るために屋外のテーブルを囲んでゲームをしている老人たちに近づき、撮影の許可を求めた。するとテーブルを囲んでいた4人の老人たちの1人が、自分を撮ってほしいと、笑顔で手を挙げた。老人たちが囲んでいたテーブルの状態をみると、どうやらゲームは一段落ついたところのようだった。

金網越しに、老人たちとの会話が始まった。そこで、私は、その老人たちにも、マルマラ地震での体験について尋ねた。すると、老人たちは、我々にテーブルと一緒に座るようにと誘った。カフヴェハネは、トルコでは男性たちの社交の場であり、女性はそこに入ることを遠慮するのが習わしだった。そこで、その男性たちの空間に、女性の私が入ってもいいのかと尋ねると、老人たちは、遠慮なく入ってくるように促した。

日本からの訪問者である私と山中の2人が老人

8 トルコの男性たちが集うクラブハウスのような場所、あるいはカフェ。多くは、定年退職して時間に余裕のある老人たちの社交の場になっている。そこで、トルココーヒーや紅茶などを飲みながら、オケイ(okey)と呼ばれる麻雀のようなゲームやバックギャモンをしたりして遊ぶ。

9 NZ氏の震災体験および救援活動での体験についての「語り」については、共同研究者である山中が独立した映像コンテンツとして制作するため、ここでは、報告を省略する。

たちのテーブルに近づき、テーブルの傍らに座り、老人たちの話を聞いた。老人の1人がそのとき席を外していたので、私は、空いたその老人の席に腰掛け、残りの3人の老人の話に耳を傾けた。山中は、ビデオカメラでその様子を記録した。

3人の老人たちは、カフェハネの給仕係にチャイ(トルコ式の紅茶)を注文し、我々2人にふるまった。私の前方に座っている老人は、赤にラインの入ったポロシャツを着て、額がはげ上がった白髪で、口ひげを蓄えていた。私の左横に座っている老人は、白いTシャツを着て、白いキャップをかぶり、鎖の着いたメガネを掛けていた。この老人は唇の上下と顎に白いヒゲがあり、左手の薬指には、彫金された銀色の指輪がみえた。なかなかお洒落な老人だとの印象を抱かせた。そして、私の右横に座っている老人は、白髪だったが口髭はなく、薄いブルーにラインの入った半袖のカッターシャツを着ていた。

地震が起こったそのとき、3人の老人のうち、2人はこの町にいて被災し、もう1人は、町から離れていたが、家族の無事を確認するため、必死で戻って来たと話した。このカフェハネの周りでも、多くの建物が倒壊したと語った。

私の前方に腰掛けていた老人は、その時の様子をこう語った。写真9は、その老人たちの様子を撮影したものである。(プライバシー保護のため画像は加工処理している。)

「1999年8月、夜中の3時だった。妻は友達と一緒だった。当時、チュナルジュック(Çınarcık)¹⁰に住んでいたんだけどね。家内は友達の所に行った。海岸のそばの。1時頃に電話すると、友達の家に行くけど、すぐに戻って来ると言った。で、2時頃に帰ってきた。



写真9 カフェハネで被災体験を語る老人たち

その夜は暑かったね。本当に暑かった。チュナルジュックは、人が洪水みたいだった。洪水のように人でいっぱいだったよ。月曜か火曜の夜だった。家内が帰って来た時、わしは寝床に入ったところだった。まだ眠っていなかった。2階建てのアパートでね。3時15分頃、パッと目が覚めて、妻に言ったんだ。雨が降っていると。家の前の石炭庫の屋根はトタンなんだ。『雨が降ってる、雹が降ってる』と言ったんだ¹¹。妻は、『え？何が雨なのよ、地震よ!』と言った。『何が地震だ。そんなことあるわけねーだろう。おい、早く寝ろ』と言り返した。でも、『地震だから早く起きて!』と言われ、飛び起きた。でも、歩けない。子どもは2人。それを遮二無二かっさらって¹²、ドアの外に飛び出した。住んでいた村は高台にあったので、ぱっと下を見たら、いたるところ煙だらけだった。そして、埃。いたるところ埃と煙だった。大混乱だ。建物が壊れて、いたるところ、埃、煙、雷。うちの前に4階建てのビルがあった。そいつが、こんなふうに倒れて、まるで大きな錠前みたいに横の大きな家に食い込んで、今度は離れて、また食い込んで…。ビルが揺れて、倒れたり、起き上がったたりした。見たんだ、わしは。…とにかく、目が覚めたわしらは外に出た。そこで、

10 ヤロヴァの西に隣接した、マルマラ海に面した町。ヤロヴァ県チュナルジュック。

11 地震による揺れの音が、トタンに雨や雹があたっている音に聞こえたのだからを思われる。

12 Çocukları bi kaptım.という表現で'kapmak'という語彙を使ったことから、ただ「連れて」という意味より「急いで、無理に」という意味を含む「ひったくる、さらう」という言葉を使ったと思われる。

近所の顔見知りで、えっと、そうビルの大家にタバコを一本くれと言った。それに火を点けた。止めていたんだけどな。火をつけて、ひと吸いしたんだ¹³。死んだやつは死んだ、残った者はわしらで結構だ¹⁴。町へ、下へ降りて行った。いたるところ壊れていた。…嫁入り道具のそばで…娘が死んでいた。婚約していたんだろう。建物の下敷きになっていた。遺体は15日後に、そう15日後に出てきた。どうやれば見つけられたんだ？無理だったんだ。人間がまるで獣の死臭を漂わせていた。悲惨だった。…時間が経って、町中が閉鎖された。人は何をすればいいのか、わからなかった。叫び声や金切り声、すべてが消えていた。すべてが終わった。できることはなにもなかった。…うめき声、叫び声、手が取れた人、脚が取れた人、もぎ取れた男の頭、突き出した脚。わしは見た、そのもぎ取れた頭、突き出した脚を。避暑に来ていた人たちだから、知り合いじゃないけれど、それでも人は人。どこの誰であってもね。わしはそんな経験をした。それがまだ続いている。でも、今じゃそれほどでもない。人間は慣れるものだろう。本当は、人は地震が怖いんじゃない。建物が壊れたりさえしなければ…アッラーよ、もうこんな光景を見させないでください。」

上述の「語り」に相当する口述記録の原文(トルコ語)は以下のとおりである。

1999 Ağustos, gecenin gece üç. Benim eşim arkadaşla beraber. Çınarcık'ta oturuyorum ben. Orda arkadaşına gitti. Sahilde deniz kenarında. Gittiğinde ben aradım saat bir gibi. Dedi ki bana 'Arkadaşıma gidiyorum biraz sonra geleceğim.' Saat ikide eve geldi. Bir saat

sonra geldi ama o akşam çok sıcaktı. Çınarcık insan böyle su sel akıyor. Sel gibi insanlar. Kalabalık çok kalabalık. Ama çok sıcak. Salı akşamıydı. Pazartesi akşamıydı. Geldi eşim, ben yeni yatmıştım, daha uyumamıştım. Benim oturduğum ev iki katlıydı. Üçü çeyrek geçiyor saat. Bi uyandım. Hanıma dedim 'Yağmur yağıyor'. Evin önünde üstü saç sey var böyle. Kömürlük vardı. Yağmur yağıyor dedim, dolu yağıyor dedim. 'Ha? Ne dolusu ya. Deprem oluyor' dedi. 'Olmaz ne deprem lan. Yat.' dedim. 'Ya deprem oluyor, kalksana' dedi. Bi kalktım. Evden dışarıya çıkamıyoruz. Ben zemin katta oturuyorum. Ev üstünde de ev, kiracı var. Çıkamıyorum evden. İki tane çocuk var. Çocukları bi kaptım doğru kapının önünde çıktım. Aşağı, benim ev köy içinde yukarıda. Aşağı doğru bi baktım ki, her taraf dumandı. Toz. Her taraf toz duman. Kıyamet kopuyor. Binalar çökülünce her taraf toz duman. Gök gürültüsü. Benim komşuda hemen karşımda dört katlı bina, evi var. Karşımda. Böyle yatıyo sanki bina kocaman evi kitley. Yatıyo geri kalkıyo. Öyle görüyorum ya. Neyse uyandık kalktık dışarıya çıktık. Bir sigara istedim ev sahibinden, şey. Karşıdaki komşunun şey arkadaşından. Yaktım sigarayı, bırakmıştım zaten. Yaktım bi fırt çektim. Ölen öldü kalan bize yeter dedim. Çarşıya aşağı bi indim ki her taraf yıkılmış. … Kızın çeyizle beraber çeyiz nişanlıydı kız. Öldü binanın artında kaldı. On beş gün sonra çıkartık cenazesini. On beş gün sonra. Bulamıyorsun ki… Leş gibi insan leş kokuyor.

13 老人が使った“Yaktım bi fırt çektim”という表現から、この老人がいかにか慌てていたかが想像できた。止めていたタバコを一服したことで、気持ち落ち着き、何が起こったのか把握できたのだろう。

14 つまり、「生き残ったことに感謝しなければいけない、これ以上やれることはない」という意味だと思われる。

Çok felaket. Neyse zaman geldi geçti işte ondan sonra her taraf artık kapalanıyor. Ama insanlar ne yapacağını bilemiyordu. Çılgılık çılgılık. Her taraf gitmiş. Yapacak bi şey yok. Elinden bi şey de gelmiyor. Bağıranlar. Kolu kopan bacağı kopan. Adamın kafası kopmuş ayakları çıkıyo. Ben öyle gördüm ya. Kafa kopmuş. Ayakları çıkmış. Yazlıkçılarından tanıdığım değil. Ama o da insan, nerdeyse. O şekilde bi hayat yaşadık. Ama bu devam etti bu arada. Halen daha devam ediyor. Ama o kadar değil. Taa insanlar alıştılar. Devam ediyor ama öyle insanlar korkmuyorlar artık. Aslında depremden insan korkmaz da binalar çöktüğü için. Yoksa. …Allah göstermesin.

老人は、動作を交え、熱のこもった口調で語った。彼の言葉から、当時の様子をありありと思い浮かべることができた。「我が家の前に建っていた4階建てのビルが、隣家の上に倒れて、まるでがっちりと鍵がかけられたように動かず乗っていた」という表現が印象的だった。老人は、たんに「倒れた」と言わず、倒れたビルと下敷きになった家を「鍵」に例えて、その状態を表現したのだ。

この老人が語っている間、私の左横に座っている白いキャップの老人は、紙巻きタバコを吸っていた。私の方に煙が流れていかないように気遣っていたか、老人は、左手にタバコを握っていた。

そして、私の右横の老人が語り始めた。彼は、地震が起こった時、チャナッカレ(Çanakkale)¹⁵にいたという。そこから家族のいるヤロヴァに車を使って、急いで帰ることにした。しかし、普段なら3時間で帰れるところが36時間近くかかったという。「途中で、ガソリンがなくなり、ガソリンスタンドに寄ったが、長蛇の列だった。その時

は、お金のあ人もない人も、同じ列に並ぶしかなかったんだ。アッラーよ、どうか誰もこのような目に遭わせないでください」と老人は言葉を締めくくった。

この後、老人たちの話題は、しだいにマルマラ地震から離れ、この調査が行われたころ、連日、ニュースで大きく報道されていたギリシャの山火事へと移っていった。そこで、我々は感謝の言葉を述べて、その場を離れた。

こうして、我々は一日の調査を終え、ヤロヴァの港からフェリーに乗船して、イスタンブルへと帰路についた。フェリーがイスタンブルに着いたのは、夕刻だった。

3. 考察～マルマラ地震の被災者自身の「語り」がもつ意味、そして、それに耳を傾ける「知」の習慣について

a. 表現文化としての「語り」～メッター喩の歴史
まず、今回、その一部を紹介したマルマラ地震の被災者の「語り」を口述記録として収集する作業をとおして、トルコの社会と文化において、これら記録された「語り」がもつ意味について考えたい。

日本語の訳文をとおしても、すこしく再現することができたと思われるが、被災者たちは、彼ら自身の個別的経験を「語る」ことに、きわめて積極的であり、また、雄弁であった。そして、彼らの「語り」を一つの表現行為として捉えてみれば、個人差はもちろんあるものの、彼らが選んで使用する語彙やレトリック的確さ、そして、それが、声の抑揚や身体の動きを伴って展開する巧みさによって、それらの「語り」は、すぐれて統合性をもつ表現行為だとみなしうるだろう。さらに、彼らの「語り」が聴く者の感情を揺さぶり、共感を醸成するという点で、たとえ練り上げられた芸術的表現としての洗練や熟達を重ねられていなくとも、

15 トルコ共和国北西部に位置したチャナッカレ県の県都で、ダーダネルス海峡に面した港湾都市で海上交通の要所。

そこに口承文芸や話芸に共通する要素を見出すことも可能であると思われる。

このような表現としての「語り」は、たんに、民衆自身が経験した災害の事実として、歴史的な記録の一部として保存されるだけでなく、また、将来の防災への備えという行政的な目的の実現に効用があるというだけでなく、時代と空間を超えて伝承され、その「語り」自体が、民衆生活に新たな知的な高揚や情緒的な潤いをもたらす民衆自身による意義深い営みであると言うべきだろう。それは、これまで民俗学や文化人類学、あるいは、社会史としての歴史学が認めてきたところのものであり、その重要性は、日本であれ、トルコであれ、あるいはそれ以外の地域であれ、普遍的な価値として変わるところはない。

トルコの社会にも、古くはオスマン朝以前の時代より、口頭伝承文芸としてさまざまな「語り」の形式が、たとえば、芸能という形態をとって継承されてきた。一例を挙げれば、メッダー嘶はその嚆矢である。

トルコ民族において、物語を口述で語るという行為の原型は、イスラム教が入ってくる以前のシャーマニズムが支配する社会では、シャーマンの言葉を伝える行為として存在していたといわれる。アナトリアでは、14世紀から人々が集う会合などで、特に英雄物語や聖人伝説を朗読したり、語ったりする人を「メッダー」と呼び、それらによって語られる口承文芸を「メッダー嘶」と呼んだ。トルコ民族がイスラム教を受け入れ、現在のトルコ共和国の領域と重なるアナトリア地方に移住すると、アラビアやイランの影響を受け、宗教物語や聖人伝説、カーリーナとディムナ¹⁶、シェフナーメ、千夜一夜物語などの作品が語られるようになった。16世紀末になると、イスタンブルな

どの大都市では、現実社会や実生活にかかわる事柄も語られようになった。17世紀に活躍したメッダーのトゥフリー¹⁷は、メッダー嘶の発展に大きな足跡を残し、トゥフリーが作ったと言われる数々のメッダー嘶は、当時のイスタンブル市民たちの日常生活を活写するものとなった。

今日、残念なことに、このメッダー嘶はトルコの芸能文化から消滅し、伝承されてきたメッダー嘶は、書き残された逐語録の中においてのみ、その存在を示すものとなっている。しかし、このメッダー嘶の歴史が明らかにするように、トルコの社会においても、「語り」を重要な表現文化として尊重し、独立した芸能にまで洗練させた歴史的事実が存在していたことは明記されてよいはずである。

b. 近代民俗学からの関心の不在

このように「語り」を表現文化として尊重する十分な歴史的条件を持ちながら、被災者の「語り」への関心がまだ十分に認知されていない原因には、また別の要因も関係しているように思われる。それは、トルコにおける民俗学発展の固有の条件に関わっている。トルコにおける民俗学者の一人、チョバンオール(Çobanoğlu)¹⁸によれば、トルコにおける民俗学の展開は、第一次世界大戦の敗戦によって、オスマン帝国が崩壊したことが大きく関係しているという。スルタン=カリフ制を基盤とするイスラム教帝国の崩壊とアタチュルクによる世俗主義的近代化によって、それ以前の広大な帝国の領土ともに、国民統合の支柱としてのイスラム教を失ったトルコ人たちは、あらたなアイデンティティと国家統合の拠り所となる「トルコ民族」を発見したといわれる。そして、トルコ民族の文化的内実を満たし、その統合を裏付けるものとし

16 アラビア語文学の物語。寓話集。

17 原語で、Tıflı(トゥフリー)。この詩人については、Güngör, Şeyma: *İstanbul Meddah Hikayeleri 1 Tıflı Hikayesi*, Çantay Yayınevi, İstanbul, 2006が詳細に論じている。

18 Özkul Çobanoğlu, *Halkbilimi Kuramları ve Araştırma Yöntemleri Tarihine Giriş*, Ankara: Akçağ Basım Yayım Pazarlama, 1999, pp.27-32.

て、「昔話」「民間伝承」「伝統文化」などのフォークロアなるものにその関心を向けていった。

近代化、産業化による「伝統文化」の空洞化がフォークロアの発見への契機となることは、近代国民国家にとって共通の現象かもしれない。しかし、トルコ共和国に関しては、その時期が、ヨーロッパに対しては1世紀、日本のような後発近代国家と比べても、半世紀の遅れがあった。この民俗の発見における時間的ギャップが、今日でも、トルコにおける民俗学の進展に影響を及ぼしているように思える。

このような時間的ギャップが原因となって、民俗学研究の主要な対象が、いまだに民俗文化における日常的連続性をもつ事象への重視(ノモス偏重)、それに対して、「事件」「事故」など、非日常的で、繰り返しのない「一回性」を特徴とする事象への軽視(カオス軽視)となって現れているように思える。実際、先述のチョバンオールが1999年に作成した、民俗学が対象とすべき領域一覧¹⁹においても、農村／都市生活様式、移住／移動、照明／暖房、狩猟、養蜂、衣服、民間信仰、通過儀礼などノモスに関わる領域は網羅的に加えられているにもかかわらず、飢饉、伝染病、戦争、災害などの非日常的でカオスにかかわる領域については、まったく目配りがされていない。このようなトルコにおける民俗学特有の傾向が、災害の「語り」への民俗学的接近を妨げているのかもしれない。

c. 民衆の「声」を聴く「知」の習慣について

最後に、今回のフィールドワークの経験をとおして、もう一つ付け加えておきたいことがある。それについては、本報告の共同執筆者である山中が自身の印象を綴った以下のようなエッセーを再録し、問題提起としたい。

「トルコ地震の被災地で考えたこと～話したい被災者と、聞く習慣のないエリートたち～」²⁰

トルコ地震の被災地ヤロヴァに出かけました。来年で地震発災から20年、被災者の声がどのように歴史に刻まれているか知りたかったのです。そして、できれば自分たちも、その声を聞きたいと思っていました。

そこで、知人の大学研究者に話をしてくださる被災者を探してもらうよう頼みました。その知人からは「話をしたがる人はいないだろう。話かけても避けるだろう」といわれました。それでも、とりあえず被災地を訪ねてみることにしました。

震源地近くの町では、地震の被害は跡形なく消えていました。町には地震を記憶するモニュメントや記念碑はありませんでした。慰霊碑は軍隊の基地の中であって、市民は許可がないと見ることができないとのことでした。

人々は忘れたがっているのだろうか。知人の言葉が頭をよぎりました。ところが、車を止めたそばの商店主に何気なく地震の話をしたところ、驚きの反応が現れたのです。

その店主の口からは、嫌がるどころか、記憶が堰を切り、言葉が溢れ出してきたのです。

「息子が亡くなった蜂蜜屋の親父さんがいるから連れてきてやる」と連れてこられた親父さんも、「よく話をきいてくれた」と涙を流して、地震のときの経験を話してくれました。それも、通りの真ん中でした。周りにいる人も聞き入っていました。小さな録音機で声を記録しました。

街を歩くと、公園がありました。老人たちがベンチに座っています。その老人にも声をかけると、同じように言葉が溢れてきました。「崩れた瓦礫の中に閉じ込められていたんだ。まるで生きて棺の中にいるようだった」と語る老人。

19 Özkul Çobanoğluの前掲書pp.32-35では、農村／都市生活様式(Köy, kasaba ve kent yaşamı)、移住／移動(Yerleşim-yerleşim türleri)、照明／暖房(Aydınlanma, ısınma)、狩猟(Avcılık)、養蜂(Arıcılık)、装飾(Süsleme)、衣服(Giyim-kuşam)、民間信仰(Halk inançları)、通過儀礼(Geçiş dönemleri)など、26項目が列挙されている。

20 山中速人エッセー(フェイスブック2018年7月28日収録)<https://bit.ly/2NmzzWN>

それにうなずく周りの老人たち。

老人たちが集まるカフェハネ(トルコ式カフェ)を訪ねると、ゲームをしていた老人たちが「寄っていけよ」と席に招いてくれました。そして、そこでも地震の記憶が言葉になってほと走りまわります。

大学の教員である知人の予想とはまったく違っていました。被災者たちは話したいのだと思いました。自分のことばで記憶を伝えたい。そして、誰かに聞いてもらいたいのではないか。阪神淡路大震災のあと、地震の語り部たちがしてきたように、多くの被災者たちが一人ひとり自分たちの記憶を伝えたいのではないか。しかし、その声に耳を傾ける人がここにはないように思いました。

ひょっとして、お役人、研究者、学生たち、この社会のエリートたちに、市井の民衆の声に耳を傾ける知の習慣がないのではないか。被災者一人ひとりの声に耳を傾けることの大切さを、まず、伝えたい。そんなことを考えて、現地を離れました。来年の夏で発災20年を迎えます。

被災地で出会った被災者たちは、我々を避けることなく、積極的に招き入れ、被災の事実や状況について言葉を尽くして語り、その喜怒哀楽の感情を情感豊かに表現し、我々の共感を誘った。当初、知らされていたような、面会を避けたり、語りを忌避したり、話すべき話題を持たないというような態度は、すくなくとも我々が出会った人々に関しては、なかった。大学研究者や退役軍人たちから聞かされていた話と現実到我々が遭遇した人々とのこの大きなギャップがどこからくるのか、その違和感の根源に我々は関心を持たざるえない。

もちろん、我々が出会い、その「語り」に耳を傾けた人々は、おそらくは退職して時間に余裕のある男性の高齢者たちであり、女性は一人もおらず、また、現役の勤労者もいなかった。だから、

我々が抱いたような違和感は、たんに我々が遭遇した対象者がたまたま例外的に「語り部」としての能力を持っていたことに由来するのかもしれない。しかし、我々が遭った人々を例外とするだけでは、震源地の町に民衆自身による慰霊碑やモニュメントが一つも存在しないことが何を暗示しているかを解くことができないように思われる。

もし、我々の予感のとおり、トルコにおける知識人や高等教育を受けたエリートたちに、民衆の声に耳を傾け、その語りを聴くという「知」の習慣が十分に育まれていないとすれば、現に我々が遭遇したような、自分たちの経験や感情を表現する、いいかえれば「語り」たい民衆の欲求が、トルコの社会の中で、どのように回収され、満たされていくのかについて、あらためて考える必要があるのではないか。

現在のトルコを覆うポピュリズムの台頭と、そのような「語り」たい民衆の欲求がどのような形で切り結ぶのか、今後も、注視していかなければならない。

参考文献

- Çobanoğlu, Özkul: *Halkbilimi Kuramları ve Araştırma Yöntemleri Tarihine Giriş*, Ankara: Akçağ Basım Yayım Pazarlama, 1999.
- Güngör, Şeyma: *İstanbul Meddah Hikayeleri I Tıflı Hikayesi*, Çantay Yayınevi, İstanbul, 2006.
- 林勲男「災害にかかわる在来知と文化」橋本裕之、林勲男編『災害文化の継承と創造』臨川書房、2016年、pp.14-28.
- 井藤聖子、山中速人、「近世トルコの口承文芸にみる都市のイメージとエスニシティの多様性～メッター嘶とそこに表現されたイスタンブルとエスニック集団～」『総合政策研究』No.50, 2013年5月、pp.45-60.
- Kasapoğlu, Aytül: Mehmet Ecevit, Impact of the 1999 East Marmara Earthquake in Turkey, *Population and Environment*, Vol. 24, No. 4, March 2003, pp.339-358.
- 木村周平「人類学における災害研究」橋本裕之、林勲男編『災害文化の継承と創造』臨川書房、2016年、pp.29-43.
- 阪本真由美、木村周平、松多信尚、松岡格、矢守克也「震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究-トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から-」『京都大学防災研究所年報』No.52B, 2009年6月、181-194.